第4章 半分人間

01 — 手の重さ

かつてダニエル・リードは誕生日で年月を数えていた。事故の後、医師たちは移植組織の交換回数で年月を数えるようになった。初めて水をこぼさずにコップを持ち上げられたとき、病室には三人いた。三人とも別々の表示器を見つめていた。コップは、その小さな達成を記録する医療機器より軽かった。誰も自分の顔を見ていないことに腹が立ったのを、彼は覚えていた。

クロノスは独立資料庫でロイの隣に座り、その証言を読んだ。交通事故の調査のときと同じ借り物のコートを着ており、袖が手を覆っている。証言の傍らには再建されたダニエルの腕の図面があった。生身の人間の筋肉と、実験室で育てたレプリカント由来の組織が、神経の橋を通じてつながれている。

「痛かったの？」と彼は尋ねた。

「記録では痛かったそうよ」とレイチェル。「でも、使えるようにもなった」

「記録なら何とでも書ける」

「そうね。だから、まだ断る力のあった本人の証言を読んでいるの」

ダニエル自身の言葉は手術報告ほど整然としていなかった。《触れる前にスプーンを感じるときがある。熱いコップで火傷をしても感じないときもある。この腕が優れているかどうかは、もう聞かないでほしい。私は朝食を食べたいだけだ》

ロイはクロノスがその一節を読み直すのを見た。少年は衝撃を受けたというより、苛立ち、恐れ、ありふれた願いを持つ声に出会って安堵しているようだった。

02 — 最初の境界線

資料庫には、術後のダニエルの身体について二種類の記述があった。一方は医学的な一覧で、残された人間由来の組織、修復された臓器、レプリカント由来の血管移植片、人工神経の支持構造を列挙している。もう一方はヘリックス・バイオロジクスの契約書だった。同じ組織を、使用許諾された材料と企業独自の処置に分類している。医学記録の中でダニエルは患者だった。しかし契約書の中では、企業が所有物を保管する場所へと変わりつつあった。

エイドリアンは契約書を明かりにかざした。「ダニエルを所有すると主張したわけではない。提供したものへの支援を引き揚げる権利を主張したんだ」

「支援を切られたら死ぬなら、何が違う？」とロイ。

「実質的には、ほとんど何も」

レイチェルはセバスチャンの筆跡で書かれた古い指示書を横に置いた。処置後も移植細胞によって命をつながれた、傷ついた実験動物についての記録だった。《修復に成功したからといって、修復された存在の所有権を得るわけではない》

「ダニエルについて書いたの？」とクロノス。

「事故より何年も前よ。だから意味がある。この議論に勝つための文章じゃないの」

ロイは暫定憲章を思い出した。都市は、公的な身元が確定しない人物のために権利を書き記す方法を学んだ。ダニエルは、もっと古い同じ罠の中で生きていた。身体が装置を必要としても、その製造者の所有物にはならない。

03 — 鏡の中の知らない男

経費削減のおかげで、リハビリの写真は物理フィルムのまま残されていた。後になって誰もその決定を覆そうとはしなかった。そこには不規則な間隔でダニエルが写っていた。髪は薄くなり、傷痕は消え、別の場所に現れている。タイレル時代の集合写真にいた若い研究者より年老いてはいたが、いつも同じ人物だと分かった。

四番目の写真群までは。

そこで顔の比率が変わっていた。医学的な説明には《矯正的再建》と記されている。事故から十八年後のことだった。クロノスは、病室の鏡に向き合う中年のダニエルの姿を見つめた。

「鏡を覚えている。白い部屋の反対側にあった」

「この部屋なの？」とレイチェル。

「分からない」

その答えは、確信に満ちた推測より重要だった。MBU-09では、命じられれば分類結果を返すよう訓練されていた。今は問いを開いたままにしてよい。

写真の下にはダニエルの字で注釈があった。《この顔が私のものなのは、これとともに生きなければならないからだ。母が知っていた顔ではない。だからといって偽物でもない》

ロイは自分の再建された身体を思った。都市は「本物か、複製か」の一語を要求してきた。ダニエルの言葉は、手軽な代案を示すことなく、その二択を拒んでいた。

04 — 五十パーセントの意味

初期治療班の表には、赤い太線で囲んだ「50」という数字があった。後年の企業向け資料は、ダニエルの半分が人間、残り半分が製造物であるかのように、その数字を繰り返し引用していた。レ

イチェルは紙を裏返した。裏には担当医が、それは治療計画上の概算であって人格を測った数字ではないと説明していた。脳を脚と天秤にかけることなどできない。組織は、手術のたびに変化する境界を越えて信号をやり取りする。

「人は簡単な数字が好きなんだ」と、安全な音声回線からベクターが言った。彼は評議会による旧軍調達制度の監査を手伝っているだけで、資料庫の決定には参加していなかった。「数字があれば命令も作れる」

「言い訳も作れる」とロイ。

クロノスが身を乗り出した。「だったら僕を『半分人間』って呼ばないで」

「何と呼んでほしい？」とレイチェル。

「まだ分からない。でも分数は名前じゃない」

彼らは、元の医学的概算と医師の但し書きを一緒に保存することにした。数字を消すのは記録への不誠実だ。しかし注記なしで数字だけを印刷すれば、ダニエルが記した傷を繰り返すことになる。

午後、患者審査評議会のボランティアが、ファイルを引用してよいか許可を求めた。クロノスは申請を自分で読み、医師の注記には同意し、臨床写真には同意しなかった。担当者は二つの回答をそれぞれ記録した。

05 — 終わることのなかった治療

ダニエルは病院を退院していた。しかしヘリックス社は、彼を治療から完全に解放したことがなかった。移植片を交換するたび、変化する生体組織に合わせた薬剤、会社の施設でしかできない調整、仕様が公開されない交換部品が必要になった。

ダニエルは緊急時に別の医療機関で診療を受けられるよう、情報の提供を求める手紙を書いた。ヘリックス社の返答は彼の忍耐力を褒めながら、独自設計の情報は開示できないと断っていた。

ロイは二通を並べた。丁寧な言葉遣いは脅威を見えにくくしただけで、脅威そのものを小さくはしなかった。

「彼は出ていけたの？」とクロノス。

「職場からは離れた。建物からも離れた」とエイドリアン。「でも、会社の許可の仕組みを身体の中に抱えていた」

レイチェルは、この構造に初めて実際の穴が開いた記録を見つけた。二人の技術者が修復手順を紙の綴じ込みに写し、独立診療所へ密かに渡したのだ。彼らはダニエルの個人記録を盗もうとしたのではない。支払いが一度滞っただけで彼が死なないようにしたかった。

翌朝、二人の名前は給与台帳から消された。後にダニエルが匿名で家族を支援していた。

「受け身の実験台ではなかったのね」とレイチェル。

「ああ」とロイ。「生き延びる方法を見つけたからといって、自由だったわけでもない」

06 — 古い友の声

最も扱いにくい記録は手術ではなく、事故から何年も後、研究企業が問い合わせに答えなくなったころレイチェルが残した短い音声だった。録音は傷んでいて、エイドリアンが復元できたのは断片的な言葉だけ。ダニエルはまだ訪問者を望んでいるのかと尋ね、自分が誰かを覚えているからといって、その人の時間を要求できるわけではないと話していた。終わりには、彼からの返事を読んで笑った声が入っていたが、返事そのものは失われていた。

レイチェルは一度だけ聞き、エイドリアンに止めてほしいと頼んだ。

「送ったことを覚えていないわ」

クロノスは、その告白を急いで慰めようとはしなかった。

「あなたの声は覚えている」とようやく言った。「この録音じゃない。誰かに反対する前、少し間を置いていたこと」

レイチェルは彼に向き直った。「私も、みんなが忘れていた人に話を向ける青年を覚えている」

「それがダニエル？」

「そうかもしれない。でも、あなたに彼を演じさせて証明するつもりはないわ」

雨が資料庫の窓を打っていた。ロイは、過去が解き明かすべき一つの謎から、慎重に扱わなければならない関係に変わり始めたのを感じていた。

07 — 軍が受け取った身体

最後のフォルダは、ヘリックス社の医療計画が、のちに対象をクロノスと呼ぶ軍事計画へ移っていく過程を記していた。劇的な移送命令などない。あるのは修正契約の連鎖だった。共同研究は安全保障契約となり、継続性に関わる患者は評価用資産となり、ダニエル・リードという名前は主な対象欄から歴史的注記へ移された。

「ここで彼を消したんだな」とロイ。

「完全には消していない」と隔離端末からヌルが答えた。「監査人がいちばん見そうにない場所へ隠した」

軍が欲しがったのは、記憶の継続記録に残された専門知識だった。生きた人工組織を理解し、その故障を見抜き、旧式の戦闘機体では入れない狭い設備へ入れる専門家。少年型の身体が現れたのはそれより後だ。クロノスという呼称も後から与えられた。

軍用の制御装置は、生物学的な身体再建の機構とは別に組み込まれていた。そのため当局は、一体の軍事装備を廃棄したと認定し

ながら、それ以前の医療記録を知らずに済んだのだろう。ただし、その説明でも、いま少年がロイの隣に立っている理由までは解けない。

クロノスは最古の写真の下に印刷された名を指でなぞった。《DANIEL REED》

「元に戻さないで」と言った。

ロイは待った。

「まだ。ダニエルは本当にいた。でも、僕もここにいる」

08 — 測らないという選択

一行は日が暮れる前に資料庫を後にした。通用口では作業員が壊れたスロープを直しており、重い板を押さえてほしいと頼まれた。ロイは使える出力をすべて使わずに板を持ち上げた。クロノスはボルトを一本ずつ手渡した。誰も、彼の身体がどこから来たかを聞かなかった。

作業が終わると、作業員がお茶を勧めてくれた。クロノスは受け取り、冷めるのを待った。技師に感覚を調整されたのかもしれない者らしい慎重さで口をつけた。それでも、その感覚は使うときには彼のものだった。

「自分がダニエルかどうか、分かったか？」と川へ向かう道でロイが尋ねた。

「人々が彼の価値を勝手に決め続けたことは分かった。彼も、自分の望みを伝え続けた」

「それは答えじゃない」

「うん。でも、僕が生きる前にすべての問いに判決を出さなくていいって、あなたが言った」

独立審査委員会から連絡が届いた。ヘリックス社の後継企業が、監督下で一通の封印された治療経過記録を開示することに同意したという。ダニエルが人間として回復した最後の記録から、軍が初めて彼をクロノスと呼ぶまでの年月を扱ったものだ。まだ誰も開封していなかった。

クロノスは、開けるときにはレイチェルも呼んでほしいと頼んだ。自分のいないところで開けてほしいとは言わなかった。

川の向こうでは、修理された公衆給水栓に夕暮れの灯がともっていた。都市の記録の外には、最初の存在よりも古い起源を主張する通信が残っている。今夜、ロイはその途方もない主張を後回しにした。隣を歩く者には、もっと小さく切迫した問いがある。ダニエル・リードに何が起き、生き残るものを決める権利を誰が持っていたのか。

クロノスは封印された申請書を、自分の両手で持っていた。